

## 極私的メディア革命論 - RIAKI

私の芸術、及び、夢解読研究の師は、60年代に「ゼロ次元」という前衛パフォーマンス集団を率いて時代の寵児となったアーティスト、加藤好弘（1936 - 2018）である。闘争の60年代当時からカリスマアーティスト/アートテロリストと呼ばれていた通り、私たちの心の癌を切り裂く時も、人生がよじれるほど笑わせる時も、いつも彼の言葉は人間の魂から発射されてくる爆弾だった。80年代生まれの私にとって、彼がぶつけてくるカウンター・カルチャー魂の生の声は、私がこの世で初めて耳にする本物の戦う芸術論であり、彼のアジを聞いた途端、もうとっくにあきらめたはずの闘志のようなものがどっと噴き出してきて、私の胸を苦しいほどいっぱいにした。それは、子供の頃の私だった。すなわち自分を表現するその度に大人たちにズタズタにされ、いつからか自分でも殺すようになった私の本心だった。でもそれを生きることが「生きること」だ、と加藤だけは言った。

『人生をかけて、その子を生き返らせるんだ。いつかその自己と君が一体になり、魂を生きる者として蘇生する瞬間までの極私的な戦いの記録が、本来のアート表現なんだ。いま君が自分だけの「極私的な戦いのメディア」を手に入れたら、この人間画一化のグローバリズムから脱出して「個」の魂を蘇生すること、それが次の時代の革命だ！』

今日の私たちは、ネットやスマホなどいつでも外の世界と繋がれるメディアを持った。じゃあ、自己と繋がるメディアは？私たちがネットやテレビについて中毒し依存してしまうのは、自分が内なる自己と繋がっていない限り誰と何をやっても虚しいからかもしれません。「誰でもよかった」というあの言葉は、誰でもない人に向けて垂れ流される映像や情報を「あなただけの現実」として脳に記憶(コピー)させられる毎日の結果を正確に表している。元革命家で獄中生活も経験した思想家ベルナル・スティグレルは、スマホやテレビで個人生活に侵入したマスメディアが、たとえそれをあなたが「あなただけの時間」であるはずの一人のときに見ていても、実はあなたを、それを見るのは「あなたでなくてもいい」他の大量の人たちと同じ意識の時間の中に「あなただけの時間」を消費させている、と解説する。ならば、今の時代の革命の本当の舞台こそ、各人が「自己」と交信するために持つ「極私的なメディア」の中だ。

あなたにとってどんなメディアが、自己との繋がりを取り戻す極私的な戦いの舞台になるでしょうか。私の場合、それは夢でした。ある日、夢をふとノートに書いた。すると、それは誰かから私に送られた手紙であるような気がした。私になにか伝えたがっているのはわかったけど、なにを言いたいのかわからない。わかりたい。それから毎日夢日記をつけるようになり、数年後、夢が縁で加藤に出会った。ゼロ次元で知られる加藤だが、彼には夢解読学というもうひとつの極私的な戦いがあった。私は加藤が創設した夢タंत्र研究で夢解読を学び始め、夢こそ現実世界を「自己の眼」で見た物語であることに気づく。渡米しグローバリズムの中核であるコロンビア大学の大学院に入り、夢と現実を毎日緻密に日記する私の極私的な戦いがNYで始まった。

自己との交信を可能にするあなただけの極私的なメディアは、個の特性によって様々で、絵、音楽などはもちろん、歴史や外国語の勉強など一見アートとは無関係に見えるものの場合もある。2000年代に私が衝撃を受けたのは、原宿のロリータ少女たちだ。彼女達は服をメディアに個を貫く戦士達であるばかりか、歩くだけで日常を異化するアーティストだった。福島に津波が来るとわかった時、高台に逃げるよりも、船という漁師の魂を守るために海へ向かい自分の船に乗り、あの津波を真正面から突っ切って自分の命をかけて船を守り抜いた漁師が大勢いた。あなたにも必ず、あなただけの船がある。それを生きるために私たちは生まれた。個人の時空を乗っ取るグローバリズムのメディアが世界の隅々に行き渡ろうとしている今、自己と交信する極私的な戦いのメディアを持って魂を守り抜く私たちの新しい革命は、これを読んだあなたから始まる。待っています。あなたの魂の声を、私は再び聞きたいから。